

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」3月号 (通巻第34号)

2010年2月28日発行

【発行人】赤塚祐一郎

【編集人】大森美知子

【発行所】株式会社ラジオカフェ

東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル 6F

Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

http://www.radiodays.jp

3

March Edition

2010, vol.34

Free of charge

この人の声が聴きたい◎3月

小原礼さん 加藤和彦さん (音楽家)

黒船来航。ロックもまた 夜明けの頃だった。

時は嘉永六年。マシュー・ペリーが率いてきたのは、サスケハナ、サラトガ、ミシシッピ、ポーハタンの四隻。停泊していた浦賀には江戸から物見高い民衆が殺到したという。土佐から江戸の千葉道場へ剣術修行に来ていた坂本という青年もその中にいた。

NHKの大河ドラマでは、どういうわけか、外輪船が渚の際までやってきて福山クンの顔に飛沫を浴びせるという不思議な演出がなされていた。

たった四杯で夜も眠れないはずの旧暦六月の江戸湾はいつもの年のように気だるい梅雨のさなかだったのだろう。高中正義は、ベタ風ぎの初夏の海が時代の風に吹かれて次第に荒れていく様子を野太いディストーションをきかせて弾き切っている。

サディステイック・ミカ・バンドのインストルメンタル曲「黒船(嘉永六年六月四日)」である。

小原礼さんは、高橋幸宏さんとともに初代ミカバンドに参加し、ファーストアルバム「サディステイック・ミカ・バンド」に続いて、二枚目の『黒船』にも参加した。

イギリスからやってきたクリス・トーマスがつきつきりでプロデュースしたこのアルバムは、文字通り日本のロックがピークへ昇りつめていく幸福な音色に包まれている。

小原さんの作曲、林立夫さんの作詞になる「扉までひとつとび」という不思議な名曲も収録されている。小原さんによれば、二人で

居酒屋で半分酔っぱらってつくった歌らしいが、「湯呑み」や「暮らしの知恵」や「へっちゃらけ」がところ狭しと飛び交うロックは、この時代にしか生まれなかったもののように思えてしかたない。

それにしても、である。

加藤和彦というミュージシャンは、いなくなつてみると、ますますその大きさが分かってくるような人だ。

『黒船』の一曲目、「墨松の国へ」は、「帰ってきた酔っぱらい」の加藤・松山猛コンビの作品で、朝霧のかかる東洋の島国へ向かって船が近づいていく様子を歌っている。

加藤さんが幕末維新に特別な関心を持っていたとは思えないが、ここにはこの人特有の逆さメガネで覗いたようなオリエンタリズムがある。

フォーククルセダーズが終わって、まず加藤さんは日本の近代を「黒船」に乗って訪れ、そこから自分の生きていく「今」へ向かって歩き出したのではないか。そんなことをふと考えている。その時間旅行の途中、一九二〇年代あたりで、「パパ・ヘミングウェイ」が、「うたかたのオペラ」が、「ベル・エキセントリック」が生まれたのだ。一番充実した創造の季節だったにちがいない。

でも、加藤和彦が偉いのはミカバンドを三回やったことだ。その繰り返し再び勇気に我々は鼓舞されてきたのである。

(ラジオデイズ・プロデューサー 菊地史彦)



ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。
飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(会費無料)にならると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてを試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを!

<http://www.radiodays.jp>

〈対話・放談〉

人気メルマガでおなじみ、田中宇氏の国際ニュース解説「世界はこう読め! I・II」、作家・瀧川鯉昇師匠の癒し系連続「1ク『鯉昇の屋敷まくら』、ムッシュかまやつさんや、最後のインタビュアーになった加藤和彦さんなど、ミュージシャンにお話を伺う「Music Talk」、姜尚中さん、福岡伸一さんなど知的なゲスト満載のラジオ番組の番外編「ラジオ街ブラス」が好評。さらに、気鋭の映画評論家が現代を表象する人気漫画家たちと濃厚な知的交歓をする『町山智浩の、漫画師に訊け!』が毎月配信されます。脳科学者の茂木健一郎さんが美術評論家の橋本麻里さんと歩きながら「ローンの発火のごとく言葉」を紡ぐシリーズも配信中です。

〈文芸〉

作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズでは、女優鳥丸せつこさん朗読、詩人正津勉さんナビゲートの「詩人の愛」I・IIをお届け中。女優有馬稲子さん朗読の「水仙」や、さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三師朗読による江戸弁で聴く「ゴゴリ」「外套」「鼻」も発売中。そして、太宰治生誕百年のいま、松平定知さん、山根基世さんなど熟練アナウンサー朗読の「人間失格」「斜陽」他も聴きこえたえ十分です。

〈話芸〉

ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源約三百本をお届け中。時代に磨かれた古典を自家薬籠中に現代に演じきける作家たち。そして、時代の流がれから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鑄を削る作家たち。ライブ音源だけに一期一会の斬に出会えます。また、すっきりと背筋の伸びた聴きこえたえのある講談は第二、第四金曜日に配信しています。まずは試聴ボタンを

橘家文左衛門独演会

【日時】3月16日(木)午後6時45分開演(午後6時15分開場)
【場所】お江戸日本橋亭(三越前)

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……。時代の流れから生み出された一席の噺を、口演を重ねながら書き換えていき、自家薬籠中に演じける現代の噺家たち！ 古典を腹に飲み込んだうえで、現代人にも情景がありりと目に浮かぶような落語の世界を現出させる橘家文左衛門の高座はいまもつとも熱い。いなせで豪胆な風貌と寄席の隅々まで届く大きな声の持ち主だが、緻密な構成力と繊細なディテールで、ぐいぐいとその世界に引き込んでいく暫力の持ち主でもある。至福の話芸のひとつときを。

橘家文左衛門

(ちちはなや・ふんきんもん)
橘家文左衛門下。平成十三年、真打ち昇進。大きな身体、大きな声で演じられる高座はメリハリがあり迫力がある。いずれの演目でも、濃やかな人物造形がなされ、登場人物の性格がいきいきと鮮明に立ち上がり、噺の魅力を引き出してくる。二〇〇四年、彩の国落語大賞殊勲賞受賞。



鈴々舎わか馬

(れいれいしゃ・わかば)
鈴々舎馬桜に入門。平成平成十二年、二つ目昇進。平成十八年より鈴々舎馬風門下。上品で軽い持ち味に加え、最近では歌や物まねを織り込んだ高座が楽しい。細部を膨らませた噺に定評があり、ほんわかした雰囲気や落語の世界に溶け込む。真打昇進間近、期待の若手である。



明烏い話

連載第36回 本田久作

両手の指で数えられるほどの貴重な例外を除いて、今『火焰太鼓』を演じる噺家のほとんどは志ん生のものをそのまま踏襲している。その踏襲ぶりが尋常ではない。彼らの高座を速記に落とせば、おそらく志ん生のものと一字一句違わないはずだ。これは踏襲というよりほとんど物真似である。私はこういう落語を聞いていると怖くなってくる。彼らは内容を聞いている志ん生のものとまったく同じことをやっている。となると、彼らと志ん生の『火焰太鼓』の違いは、声や調子や間や雰囲気やフラといったものだけということになる。彼らは志ん生とそっくりの『火焰太鼓』を演じることで、噺家にとってそんな根元的なものを、しかも志ん生を対象にして比較されるのだ。度胸があるとか言いようがない。そしてついでに言っておけば、この比較によって志ん生よりも勝った部分が一ヶ所でもあった噺家には私はまだ一度もお目にかかったことがない。

彼らも自分たちが志ん生に遠く及ばないことぐらいはわかっているはずだ。それなのに彼らは志ん生をつくりの『火焰太鼓』を高座にかける。それは彼らが志ん生の『火焰太鼓』が大好きで、だから自分もかけてみたいと思うのだから。その気持ちは理解できないことはない。だが、それはイチローのファンが草野球でイチローのフォームを真似るのと同じことだ。真似をしている当人は気持ちがいいだろうが、それでは実際にヒットを打つこと

はできない。志ん生の持つ独特のフラがないまま志ん生のくすぐりを言っても、面白くない(志ん朝ですら「馬鹿目」の件を「馬鹿な顔をしてるでしょ。こういうのは夏になると咲くんです。馬鹿顔と言いましたな」と替えている)。それにそもそも志ん生と内容が同じ落語をやることに何の意味があるのだ。そんなことを言えば、古典落語というのはそういうものだ、という反論も出てくるだろう。内容はまったく同じでも演じる噺家によって味わいが違うのだ、と。それはたしかにその通りだが、『火焰太鼓』に関して言えば、どうしたってまず最初に志ん生ありきになるのである。志ん生がああ『火焰太鼓』を作り上げたのだ。そして客はああ『火焰太鼓』で十分満足している。だからといって、あれ以外の『火焰太鼓』は要らないと言っているわけではない。客が求めているのはまったく逆のことだ。あれ以外の『火焰太鼓』なら聞きたいと言っているのである。客が聞きたくないのは、志ん生をそっくり真似た志ん生もどきの『火焰太鼓』だ。多くは求めていない。たった一つでいい。新しくくすぐりでもよいし、間でもよい、解釈でもよい、どこか一ヶ所でも志ん生のもので違おうのであれば、それなら聞く甲斐がある。ところが彼らは何も新しいことを発見しないまま『火焰太鼓』を演じている。旧態依然の芸と言えこれでもまだ評価している方で、実際には下手糞なコピーにしか過ぎない。同じ噺でも演者によって異なるということは、『火焰太鼓』に関しては通用しない。下手糞なコピーは下手な箇所が人それぞれ違うだけで、そんなものは個性とは言わないのだ。

こういう主変わって噺変わらないう落語が少しづつ増えてきているような気がする。

たとえば『野ざらし』であり『湯屋番』である。とりわけ『野ざらし』の方はほとんど『火焰太鼓』化していて、誰のを聞いても内容はまったく同じだし、テンポや間もそれほど違いを感じられない。昔は文楽の『明烏』のように、誰かがその噺を得意ネタにしていれば、他の噺家は手を出さなかつたという。昔の方がよかつたというのは老人の繰り言で、工夫のない『火焰太鼓』を聞く時私はつくづく自分が老いたことを感じる。

●ほんた・まゆうさく
一九六〇年大阪府生、落語作家。二〇〇一年の「仏の遊」が国立演芸場日本舞臺作受賞以来、落語、漫才など新作台本演の賞を毎年総ナメの業界巨匠の新進作家、主受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本舞臺優秀作)、「僕の葬式」(按摩の夢)、「幽霊妻」(いずれも落語協会優秀賞)など

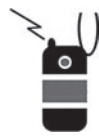
私の讃太ばなし 参拾四
三遊亭歌之介
き 『寿の春』
前座時代の後半に作った新作。高校の卒業式の送別会の回想シーンからはじまる青春落語で、九州弁で演じています。これで真打試験に十八人抜きで合格した思い出の噺です。

式 『幕末龍馬伝』
高校二年の秋に司馬遼太郎の『龍馬が行く』を読んで感動し、龍馬が十九歳で江戸に出たように自分も東京へ出ようと思いました。龍馬には憧れがあり、いつまでも情熱をもつてやれる噺で、十年くらい前から完成させつつあります。

参 『子別れ』
僕の両親は小学校一年のときに離婚していますが、真打になったときに鹿児島県のチャリティ落語会の主任でこの噺をやらせてもらった際に、生き別れた父親が応援に来ていて二十二年ぶりに再会しました。この噺の下「子は縁」では子供が縁で別れた夫婦のヨリが戻ります。僕も以来父が亡くなるまで時々会ってお酒を飲んだりしました。それだけに思い入れもあり、生涯をかけて完成させたい噺です。

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗 ③③



柳亭こみち

「兄さんその日本語間違ってますよ」たまたまず先輩に口出してしまった。先日のこと。「やらせて頂きますよ」という言葉だ。日本語には「させて頂く」「やらせて頂く」しかない。なのにこの間違った言葉を使う人口の多いこと。私だって日本語の間違いは度々あるが、こども「やらさせ族」がはびこるとは。漸家にまで侵食か。

ほかにも、「ファックスを送らせて頂く」を「送らせて頂く」と、「ビデオを録らせて頂く」を「録らせて頂く」と、「行かせて頂く」を「行かさせて頂く」と、40代、50代のいい大人がバンバン間違える。学校で習ったへせる・させるの用法はどこへいったのよ。

入門してすぐ、師匠が私に手渡した本にはへら抜き言葉を正すページに付箋がついていた。江戸時代にはへら抜き言葉はないため、21世紀の漸家も普段から、出られる／見られる／来られる／着られる、と言いつつ、へら抜き言葉を使わない癖をつけるべきだ、と師匠。へら抜き言葉は現代あまりにも氾濫し、へれる・られるを古来の使い方である若者は減ってしまった。さあ、その次に壊れつつあるのがせよ・させるだと思っている。アナウンサーですら、さらに間違える。

ある小学校での学校寄席。終演後、先生がマイク

を握りこぎった。「今日は有難うございました。これからも寄席で落語を聴かせて頂きます」。先生、それは「聴かせて頂く」ですよ。先生がこれじゃあ、なあ…。

●りょうてい・こみち
 社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味は長門。特技は日本舞踊、吾妻流名取(吾妻春美)。落語協会野球部チームR所属。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第34回

馬鹿

松井高志



「馬鹿は死ななきや治らない」という浪曲の名文句があるが、同じ「次郎長伝」でも、講談の方にはこの文句を見ない。落語には、

馬鹿につける薬はない(近日愚才など)

という言い回しがあって、これは「いろはかるた」の「あほうにつける薬はない」と同じ。こう言われたお馬鹿さんの方は「つける薬がないなら飲み薬をくれ」と口答えする。馬鹿は治らないだけでなく、放っておくと何をしでかすかわからないから剣呑だ、という言葉には、

馬鹿は隣の火事より怖い(髪結新三)

というのがある。これは町の顔役にタテつくような身の程知らずな者などをさしている。

コケの一寸、ノロマの三寸(関東七人男)

という言い回しも見られる。これは「下衆の一寸、のろまの三寸、馬鹿の開けっ放し」ともい、戸や障子を閉じるとき、下賤な者は一寸開け残し、ノロマは同じく三寸、馬鹿は全開にしておくの意。閉め方で人の品性が知れる、ということ。使いつ走りの若い者が戸を二寸ばかり開けたままにしてあるのを、「コケとノロマの中間とみえる」と言っている。

一本足りない人は気楽で結構なことだ、という皮肉のこもった言い回しもある。

聖人に夢なし、馬鹿に苦勞なし(講談「笹川繁蔵」)

のたぐい。聖人は悟りの境地にあるから妄想に悩むことなく、寝てもつまらぬ夢など見ない、また馬鹿も鈍いから世間の事に煩わされず、苦勞がない。おめえは苦勞がなくて結構だ、と笹川繁蔵は自分をからかって言う。こうなると馬鹿も悪くないような気さえしてくる。そーでもないか。

●まい・たし

一九〇〇年愛知県生、月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に「人生に効く! 話芸のきまり文句」(平凡社新書)、「デンドク」(難読漢字自習帳)、「パジリコ」(「活」に学ぶビジネスの極意)「アスペクト」など。「話芸・きまり文句」辞典 サイトは <http://vargelidom.coollog.jp/>



microSD版

ラジオデイズギャラリー

「語り」を持ち歩こう!

いま旬の漸家の息づかいもリアルな必聴落語の数々、現代がよくわかるエッジの立った国際時事解説がこんな小さなカードにみっちり満載です。

●落語永久保存30選

合計収録時間:約20時間09分

¥9,900.-

●爆笑演芸会33選

合計収録時間:約18時間24分

¥9,900.-

●特選現代落語35選

合計収録時間:約14時間11分

¥8,800.-

●田中宇の「世界はこう読め!」

合計収録時間:約11時間27分

¥3,900.-

発売中

たとえば...



ラジオデイズギャラリー入り microSDカード

microSDカードが使える携帯音楽プレーヤーで手軽に楽しめます。

パソコンで聴くには、カードリーダーをご使用ください。※携帯電話では再生できません。



Voice-Trek DS-750

お問い合わせ:(株)ラジオカフェ

<http://www.radiodays.jp/>

メール: info@radiodays.jp Tel.03-3341-1230

オリンパスモビープレゼンツ

「フジテレビ目玉名人会」(第8回)

【会場】フジテレビ・マルチシアター(会場)

【本席】2800円(ネット前売2500円)

【時間】午後3時開演(午後2時30分開場)

●4月10日(土)

三遊亭歌之介・ゲストロケット団

※トークあり。司会・塚越孝十佐藤里佳

第33回オリンパスモビー寄席

市馬・馬石二人会

【会場】内幸町ホール

【本席】2800円(ネット前売2500円)

【時間】午後6時45分開演(午後6時15分開場)

●5月10日(月)

柳亭市馬・隅田川馬石

※【予約申込受付中】ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話・011-3333-1111より、先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、伊藤博、大森美知子が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにてストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信中です。どうぞ真夜中の語らいに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

インターネットF M 毎週日曜日の深夜23時から23時半まで。

今後の放送予定(深夜のお客様)

3月7日 釈徹宗(僧侶)

14日 石川茂樹(ライフハウス アゲイン店主)

21日 辛美沙(アートフェア東京ディレクター)

28日 鎌田 實(医師、作家)

如月の落語会から

如月の落語会はオリンパスモビープレゼンツ・第7回フジテレビ目玉名人会(二月二十七日)。フジテレビとの共催による初めての試みに、お台場の同社マルチシアターには熱心な落語ファンが大集合・満員御礼で大入り袋がお客様も含め全員に配られました。

本日の主役は、古今亭菊之丞師匠。若手ながら艶っぽさに磨きがかかってきた落語界の有望株。ゲストは、三味線漫談の三遊亭小円歌姉さん。艶っぽさとメリハリの利いた芸が同居する江戸前が楽しみです。

開口一番は、入船亭扇辰門下の辰じんさん。ネタは「狸札」。扇辰師匠譲りの本寸法の芸で、やや緊張気味の客席を和ませてくれました。たつぷり、じっくり落語を楽しみました。

玉名人会のテーマ。フジポッドお台場寄席のナビゲーターご存知塚越アナと美しい高木法子アナのご挨拶、客席は期待ではち切れそう。初っぱなから真打ち登場・菊之丞師匠。オリンピックの実況中継からヒントを得たマクラ(？お楽しみ)をふった後、ネタは「浮世床」。

床屋に巣くう町内の若い衆たちを見事に演じ

分けて笑いを取りました。

続いて三遊亭小円歌姉さんが登場、粋な声と三味線でお客を魅了した後、今は亡き昭和の名人たちの出囃子を披露して、落語ファンには何とも嬉しいコンテンツが録れましたよ。さて、目玉名人会もう一つのお楽しみは、落語家の芸談が聴ける鼎談コーナー。塚越アナの絶妙な質問に、菊之丞師匠も乗せられて他では聴けない？話に花が咲きました。

仲入りの後、菊之丞師匠が再登場。古今亭のお家芸、志ん橋師匠から受け継いだ「井戸の茶碗」でトリをつとめます。人情噺の代表格とも言えるこの噺、ともすれば肩に力が入りお涙頂戴となるころ、菊之丞師匠は軽やかに演じてほろりと涙、爽やかな後味を残してくれました。満場の拍手、家路につくお客様にも大満足の笑顔が溢れておりました。いやー、古典落語って、いいですねえ。

(ラジオデイズ寺和尚)



koenka

kikunojo

「声」と「語り」をダウンロード!

今が旬の音声コンテンツ満載 <http://www.radiodays.jp>

今最もブッキング困難な役者を揃えた特別対談。絶妙な話芸と目から鱗の文化対談をお届けします。

●戦後落語論

新作落語の旗手、そして教祖的存在である三遊亭円丈に、新進の落語作家本田久作がからむ。落語ファン待望の新作落語黎明期の真相話が炸裂。

三遊亭円丈



本田久作

●戦後詩人論

戦後作家の中心的存在であり鋭利な批評家でもある高橋源一郎が、生粋の詩人にして川端康成賞の小説家でもある小池昌代と現代詩について話し合う。

高橋源一郎



小池昌代

●戦後マンガ家論

脳生理学者であり京都漫画ミュージアム館長でもある養老孟司と小林秀雄賞受賞の現代思想家内田樹。マンガに一言あるこのふたりが存分に語り合う。

養老孟司



内田樹

そのほか、面白くて物凄、朗読や落語がいっぱい。ラジオデイズサイトによるこそ!

※ご購入や無料ダウンロードには会員登録(無料)が必要です。

「オリンパスモビー寄席」携帯用特別コンテンツ

モビー寄席特別コンテンツでは、モビー寄席やラジオデイズ落語会にご出演いただいた演者さんの情報や音源、最新のラジオデイズイベント情報が携帯電話からお楽しみいただけます。



p@mobe.jp

バーコードで簡単アクセス!

左のQRコードを携帯のカメラで読み取り、メールを立ち上げて撮影写真を添付し送信。

※ドメイン指定受信の設定をされている方は、mobe.jpを追加してください。

月刊ラジオデイズ各号の1ページ目『この人の声が聴きたい』の丸抜き写真、見開きページの落語家さんのプロフィール写真を撮影、メールに添付して送信すると、アクセス先URLが記載されたメールが返信されてきます。



Mobe (モビー) とは?

オリンパス(株)とホスティング・アンド・セキュリティ・インクスの共同開発による、携帯サイト作成ツールと先進の画像認識技術によるサイトアクセス方法を月あたり263円~という低価格でご利用いただける携帯サイト作成サービスです。

個人の方から法人のお客様まで自分専用の携帯サイトを簡単に開設することができます。用途に応じて、クーポン作成やメルマガ配信などのプランもご用意しました。お申し込みは、PCから <http://pdh.mobe.jp> にアクセス!

ラジオデイズの窓から

春光うらかな季節。ネコヤナギの愛らしい花穂が光を孕んで膨らんで、明るい予兆に満ちた光景です。さて、お楽しみいただいた月刊ラジオデイズ、紙面にては今号をもってお別れとなりますが、連載の「明烏い話」「こみちが行けば」「話芸の決まり文句」は、引き続きラジオデイズサイトでお読みいただけます。新企画も準備中ですのでどうぞ今後ともご虫員のほどお願い申し上げます。